



【日本プロテオーム学会通信 No. 73】

2011. 8. 15

【日本プロテオーム学会通信】は、日本プロテオーム学会会員の皆様に配信しています。

## 【日本プロテオーム学会 2011 年会報告】

世界と連携する日本のプロテオミクス

2011 年 7 月 28 日 (木) ~ 7 月 29 日 (金)

新潟市朱鷺メッセ

年会長 新潟大学大学院医歯学総合研究科

山本 格

日本プロテオーム学会 2011 年会 (JHUP0 第 9 回大会) が無事に終わり、皆様をはじめ、関係者の方々のご協力に感謝いたします。本大会は東日本大震災後であり、また、地方都市、新潟市での開催ということで、皆様にはご心配、ご不便をおかけいたしました。お陰様で 400 名を超える皆様のご参加をいただきました。今回は、「世界と連携するプロテオミクス」をテーマに、海外から Human Proteome Organisation (HUP0) の現会長の Catherine Costello 先生を始め 20 名の講演者が参加してくださいました。世界規模で行われている「Human Proteome Project」シンポジウムや、日本が世界と連携している「Human Disease Glycomics/Proteome Initiative」や「Human Kidney and Urine Proteome Project Initiative」のサテライトシンポジウムが開かれ、日本の研究者も交えて、英語での活発な議論がなされました。

特に、「Human Proteome Project」は、2010 年に HUP0 がヒトの生命と病気を理解するために世界と連携して開始を宣言した国際プロジェクトで、その概要や、日本プロテオーム学会として参加する X 染色体プロジェクトなどが紹介されました。

教育セミナーの「よくわかるプロテオミクス」は予想以上に好評で、立ち見も出るほどの盛況でした。初めてプロテオミクスを学ぼうとする研究者などが

その概要を容易に学習できることを目標に、13人の講師がまる一日講義をしてくれました。この講義内容は、e-learning化し、近々、日本プロテオーム学会のホームページから、会員の皆様が開覧できるようにすることを企画しています。

シンポジウムは医学、生物学から植物学や農学関連を含むさまざまな分野の内容で行われました。一般演題の中から選択した演題もシンポジウムで発表していただき、大変興味深い内容のシンポジウムとなりました。

ポスター発表も100演題ほど集まり、発表時間には多くの会員が演者に質問するなど、活発に議論されていて、印象的でした。今回は、参加者の皆様に投票してもらい決定するベストポスター賞を設け、4演題が最終日に選ばれ、表彰式を行いました。

「Meet The Oversea Scientists」は、研究者を目指す若者が一人でも増えてくれることを願い、高校生に主に英語で行われるサテライトシンポジウムの雰囲気味わってもらい、海外の研究者と昼食をとりながら会話を楽しんでもらう企画でしたが、高校生にも、参加していただいた海外の研究者にもとても好評でした。

懇親会には下條新潟大学長にもお越しいただきましたが、大変盛況で、参加した皆様には、新潟の食や酒、芸能などを楽しんでいただけ、新潟の印象を深めていただけたことと思います。

また、ご参加くださいました皆様には、県産品をお買いいただきましたが、その収益の一部と、会場内での募金は、東北大震災の被災地の子供達のために使われるような団体に寄付させていただきます。ご協力ありがとうございました。

最後に、本学会を行うことができましたのも、会員の皆様と協賛企業の関係者の方々のご協力の賜物でした。深く感謝したいと思います。行き届かなかった点があったかと思いますが、本会が、会員の皆様の今後の研究の御発展の一助になりますことを祈念しております。

### 【参加者の感想】

■今年の大会の特徴は、1) 海外からの招待講演者も多く、多くの先進的な研究情報が得られたこと、2) ヒトプロテオームプロジェクト(HPP)に対して大きな関心が集まったこと、3) プロテオーム解析技術では、特に SRM(MRM)が注

目されたこと、4) ヒト以外の生物を対象にしたセッションも充実していたこと、5) 高校生を対象に啓蒙活動が行われたこと、などでしょうか。印象に残る大会でした。大会を運営された山本 格先生をはじめとする関係の方々、参加された多数の会員の皆様に心からお礼申し上げます。(平野 久：会長、横浜市立大学)

■大変な成功裡に大会を終えられおめでとうございます。海外からの招待研究者が20名ほどおられ、国際交流の点でもまたサイエンスのレベルの点でも素晴らしい大会だったと思います。大会長の山本 格先生、事務局長の吉田 豊先生はじめ研究室の皆様、組織委員会の方々に厚くお礼申しあげます。(谷口直之：元 JHUPO 会長、理事、理化学研究所)

■この度の教育セミナーの企画は立ち見の出る盛況で、特に若い会員が積極的に議論に参加してメモをとっていました。教育・訓練が重要であることが改めて認識されたのではないかと思います。今後も年会で教育・訓練セミナーを企画し、焦点を絞ったテーマで講習会を開催することを学会が支援できれば良いと考えます。(中村和行：前 JHUPO 会長、理事、山口大学)

■豪雨のため朱鷺メッセから見る信濃川が氾濫寸前という悪天候の中、約400人の方が参加されたと聞き、プロテオームという学問が科学者の間に浸透しつつあることを実感しました。特に、教育セミナーの会場は立ち見が出るほど盛況で、多くの研究者が通常の学会では聞けないような、ちょっとした実験のコツやノウハウを求めていることを痛感しました。また、海外から参加された沢山の研究者と懇親を深めることができ、とても有意義な大会であったと思います。山本先生、吉田先生をはじめとして、スタッフの皆さまに感謝いたします。(朝長 毅：庶務担当理事、独立行政法人医薬基盤研究所)

■年々、参加されている方々の全般的なプロテオミクスに対する知識と経験が積み重なり、各分野における可能性と問題点が少しずつ理解されるようになってきたと感じます。初めての教育講演や、企業賞、ポスター賞など、将来につながる効果的な取り組みであったと思います。震災、大雨などの困難のなか、

新潟大学の山本先生、吉田先生をはじめとした皆様のご苦勞に感謝いたします。

**(荒木令江：理事、熊本大学)**

■今回はじめて大都市以外で開催された新潟の大会は、大会長はじめ世話人の先生方のご尽力のおかげで多くの方々に集まっていただきましたが、特にプロテオミクスの基礎技術に関する講演のセッションに大勢の若い研究者や学生の皆さんが参加していることに驚きました。これはプロテオミクスが大学や研究所、企業などの生命科学研究の基礎技術として広く社会に要望されていることの証であり、こうした要望に適切に応えることも学会の重要な役割の1つであることを実感しました。**(磯邊俊明：理事、首都大学東京)**

■今回の学会の特徴は、従来多かったMS分析技術の方法論に関する発表比べて、臨床試料の分析報告が多くなったことであり（印象として全体の3分の1程度は臨床関係）、多くの研究機関でバイオマーカー候補が見いだされつつあります。また参加者も、過去の学会に比べての製薬会社関係者が多くなり、創薬手法のひとつとしてほぼ定着した感がありました。プログラムとしては、高レベル各演題の発表もさることながら、2日間にわたる体系的な教育講演は大変好評で、満員御礼の盛況でした。**(内海 潤：理事、京都大学)**

■教育セミナーは立ち見ができるほど盛況でした。会場でエキスパートに気軽に質問できるのが大会のよいところです。完成度の高い技術を普及させていくことが、本学会に求められているのだと思います。**(近藤 格：理事、国立がん研究センター研究所)**

■教育セミナーの立ち見のする人気ぶりを目にして、第1回のJHUP0大会でも、比較的小さな部屋を充てた技術セッションが大変な混雑と熱気だったことを思い出しました。プロテオミクスから離れてしまっている小職ですが、今回の大会では先端的・解析的な研究のみならず、「クロスオミックス計測技術」のコア技術へと進みつつある姿を感じ、大変刺激的でした。運営スタッフの皆様へも感謝いたします。**(根本 直：理事、産業技術総合研究所)**

■ポスター100演題を見て回りましたが、農学系の発表が印象的でした。これはサテライトシンポジウム 2「植物・農学プロテオーム研究のフレッシュネットワーク構築に向けて」が開かれたこととも関係しますが、日本のプロテオーム研究のこれから伸びていく方向の一つにもなると思います。ポスター会場では若者たちから説明を受けましたが、彼らの懸命な姿勢にも好印象を受けました。山本先生を始め、大会準備にかかわった人々に感謝します。（前田忠計：理事、北里大学）

## 【KHUPO 第 11 回大会報告】

横浜市立大学 平野 久

### 1) JHUP0-KHUP0 交換講演

JHUP0 と韓国ヒトプロテオーム機構（KHUP0）は、昨年から両機構の大会時に交換講演を行っています。昨年は、KHUP0 から山本 格副会長と木下英司会員が招待され、KHUP0 第 10 回大会で講演しました。そして、JHUP0 第 8 回大会では、KHUP0 の H. J. Kwon 会長が招待講演を行いました。今年は、私が KHUP0 第 11 回大会に招待されました。そして、KHUP0 の J. K. Seong 事務局長と K. -S. Park 博士が 7 月末に新潟で開催された日本プロテオーム学会 2011 年会（JHUP0 第 9 回大会）で招待講演を行いました。本会は今後も KHUP0 との交流を続けていく予定です。

### 2) 今年の KHUP0 大会

KHUP0 第 11 回大会は 4 月に韓国釜山で開催されました。同大会が終わってすでに 4 ヶ月が経ちましたが、同大会の様様を簡単に報告させていただきます。

KHUP0 は、本年で創立 10 周年を迎え、その祝賀も兼ねて国際シンポジウムとして大会が開催されました。大会には、海外から Plenary lecture（総会講演）講師として、M. Uhlen 教授(スウェーデン)、W. Hancock 教授(USA)と私が、また、招待講演者として、F. C. He 教授(中国)、山本 格副会長(新潟大学)、Y. J. Chen 教授(台湾)、A. Bairach 博士(スイス)、B. Woo 教授(USA)などが参加しました。講演は全部で 49 題、ポスター発表は全部で 117 件ありました。講演では、タンパク質の翻訳後修飾に関するものが最も多く、ヒトプロテオームプロジェクト、がんのプロテオミクスに関する発表も多かったと思います。ポスター発表では、疾患プロテオミクス、バイオマーカー探索、定量的プロテオミクスに関する発

表が多く、全体の 60%ほどを占めました。昨年、シドニーで開催された HUP0 2010 において、ヒトプロテオームプロジェクト(HPP)の開始が宣言されました。この HPP の 1 つに染色体を基盤とした HPP がありますが、その会合が、本大会直前に開催されました(JHUP0 からは山本 格副会長が出席)。また、KHUP0 第 11 回大会でも、HPP に関して議論が行われました。HPP は、韓国ではすでに重要な研究課題として認識されているようでした。

【日本プロテオーム学会通信】に対するご意見をメールにてお寄せ下さい。ご意見を【日本プロテオーム学会通信】に掲載希望の場合はその旨お知らせ下さい。

【アドレス変更/配信中止】【ご質問・お問合せ】は、日本プロテオーム学会事務局([cljhupo@secretariat.ne.jp](mailto:cljhupo@secretariat.ne.jp))をお願いいたします。